

初秋の雷雨

寒冷渦が生むゲリラ豪雨

今年の夏の異常な暑さに終焉を告げるかのごとく日本列島の各地で雷鳴が轟き、雷三日の局地的な豪雨に見舞われた。暑さも打ち止めとなり新しい涼を迎えるという、暦の上での『処暑』を前にしての、つかの間の秋の涼しさも誘いこんでくれた。

二か月近く居座り続けた真夏の太平洋高気圧が衰えを見せた一瞬のスキをついて、日本列島の上空に侵入した寒冷渦の仕業である。予想外に早く富士山に初雪をもたらした初秋の走りの上空寒気と、地面近くの夏の名残りの暑さとの間で大気の状態が不安定となり次々と雷雲が発生した。一時間の雨量が八ミリという記録的な豪雨となった横浜をはじめ、各地で三十から五十ミリという激しい雨となった。夏場の水不足の解消には台風による大雨が決定打となるが、今回のように広い範囲の雷雨も早天の慈雨として有効打ともなった。

この寒冷渦は、高さ五、六^{キロメートル}付近で一番はつきりする上空の低気圧。包み込まれた格好の強い寒気の塊を伴い、切璃低気圧とも呼ばれている。雲の渦がグルグと回転しているのがテレビ画面に写しだされてはいたが、地上の天気図上には台風や前線をともなった低気圧のような特徴ある姿を見せてくれない。激しい雷雨が等圧線のすきまからこぼれるようにあちらこちらで降り出し、天気図では姿なきゲリラ豪雨となっていた。ひまわりやレーダーでその姿が歴然と捕らえられた時には、すでにピカゴロ、ザーと暴れ始めている厄介なしろものである。

涼しさと驟雨をもたらした上空の寒冷渦が去ったあとに、また夏の高気圧が戻り厳しい残暑がぶり返してきた。しかし一度秋の涼しさを知った空は、心なしか秋めき、かつてのようなすさまじかった猛暑とは一味違った、残る夏の暑さとなってくれるのではなからうか。